



## 1. 土壌調査のはじまり、成果・利用

本格的な土壌調査は戦後にはじまりました。戦後の復興には森林資源、特に木材は建築・土木をはじめ多くの分野で貢献しました。しかし森林の伐採は、木材の急激な需要にともない高海拔地域のブナ林地帯にまでおよび、過伐・乱伐となりました。その結果、伐採量は生長量を大きく上まわるとともに、伐採跡地も広範囲におよびました。跡地は早期に森林を回復する必要があり、生長が早い人工林施業でいく方向が示されたのが拡大造林です。

現在話題になっているカラマツ、スギ、アカマツの多くは当時に植栽されたものです。樹種の選定は生長が早く病害虫に強いことでした。間伐の手遅れがいられているこれらの樹種は、林齢が45年前後に集中していることからもうかがえます。

樹種は決まったが、どのような立地条件（土壌）のところに植栽していくことが望ましいのか、その指針が求められました。研究の範囲にとどまっていた森林土壌の研究は事業として取り上げられることになったのです。

大政正隆博士の土壌分類は、現在の林野土壌分類の基礎になっています。民有林適地適木調査事業、国有林野土壌調査事業、さらに土地分類基本調査（国土調査）が開始されました。今日、造林といえば「土壌条件はどうですか」が常識化しています。

調査には土壌調査員の養成が急務であり、その条件は**全国の土壌を同一のものさしで判断できる人材**の育成でした。候補者は東京で集中研修を終了し全国に散らばっていきました。土壌調査事業は、まさに日本の林業史上まれにみる大事業で「プロジェクトX」といっても過言ではないと思っています。

調査に必要な資材、器材も乏しく、やぶをかき分け、野宿をしながら調査は進みました。成果は報告書、土壌図や適地適木表などにとりまとめられています。

その精度や水準は、各種の国際学会などにおいて高い評価を得ており「**世界に冠たるもののおほめのことばが交わされた**」（日本の森林土壌：社団法人林業技術協会 昭和58年、原文のまま）。

調査が進行するとともに、森林土壌は、森林の立地環境の重要な部分を占めるようになりました。成果は、わが国の土地利用計画、国土保全、水土保全、利水など多岐にわたる基礎的な資料を提供し高い評価を得るようになったのです。ダム問題などにも、流域の開発、治山、林地土壌の保水機能など身近なところで活用されています。特に土地分類基本調査は土壌図、地形分類図、表層地質図、水系及び谷密度図、傾斜分布図が同一図幅で、重ね見ができるように作成されており、利用上の便利と多方面から検討できるように工夫されています。

このように土壌調査は、単に適地適木にとどまらず、森林を取り扱う上から必要不可欠な事項として今日に至っています。